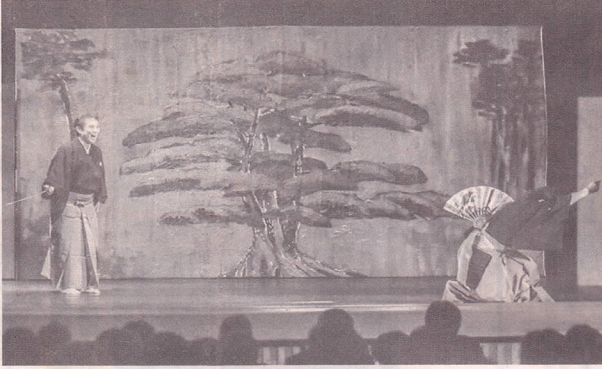


狂言の「豊かな笑い」①

小笠原匡・弘晃親子が来伯

ポ語織り交ぜた古典演目を披露

HIJラブラ（佐々木伸仁社長）主催の「狂言師小笠原匡（たかし）サンパウロ（聖）公演」が11月15、16両日、聖市リベルターデ区の文協大講堂で開催された。両日計約1100人（主催者発表）が来場。公演中には会場が幾度もどっと笑い、沸き立つなど盛況となった。16日の公演前には聖市内の日伯文化連盟「アリアンサ・大城幸夫理事長」の文化センターで能楽演者向けのワークショップが行われ、喜劇の裏に散りばめられた日本伝統文化の奥深さが垣間見られた。また、小笠原氏は本紙の単独インタビューにも応じ、伯国の日系社会に対して狂言が持つ力などを語った。



『盆山』劇中、泥棒が鯛の真似をする一幕



公演後に花束を渡された小笠原匡氏と息子・弘晃氏（左から）

「この辺りの者でござる」と、狂言の象徴的な台詞も述べられると、観客は舞台の世界に引き込まれていった。

ポルトガル語同時通訳付きで実施。今回の演目のあらすじ解説も行われた。その後、いよいよ「盆山」の上演となり、待ち待った観客の前に小笠原氏の息子・弘晃（ひろあき）氏（16）が袴姿でゆつくりと登場した。『Eu sou batedo（私は泥棒だ）』と開口一番、観客の意表を突くポルトガル語に、早速会場に笑いが起こった。

「この辺りの者でござる」と、狂言の象徴的な台詞も述べられると、観客は舞台の世界に引き込まれていった。『盆山』は、盆山（盆）の上に石や砂で風景をかたどった置物をたくさん持っている男を義理しく思った近所の男が、盗みに行く話。夜にその屋敷に忍び込んだこの泥棒は、物色している時に主人「匡氏」に気づかれてしまう。主人の方はこの泥棒が顔見知りだと気づくが、どうせなら「なぶつてやろう」と思いつく。盆山の陰に隠れる泥棒に向かって「あれは犬か、猿か」と言

「この辺りの者でござる」と、狂言の象徴的な台詞も述べられると、観客は舞台の世界に引き込まれていった。『盆山』は、盆山（盆）の上に石や砂で風景をかたどった置物をたくさん持っている男を義理しく思った近所の男が、盗みに行く話。夜にその屋敷に忍び込んだこの泥棒は、物色している時に主人「匡氏」に気づかれてしまう。主人の方はこの泥棒が顔見知りだと気づくが、どうせなら「なぶつてやろう」と思いつく。盆山の陰に隠れる泥棒に向かって「あれは犬か、猿か」と言

「この辺りの者でござる」と、狂言の象徴的な台詞も述べられると、観客は舞台の世界に引き込まれていった。『盆山』は、盆山（盆）の上に石や砂で風景をかたどった置物をたくさん持っている男を義理しく思った近所の男が、盗みに行く話。夜にその屋敷に忍び込んだこの泥棒は、物色している時に主人「匡氏」に気づかれてしまう。主人の方はこの泥棒が顔見知りだと気づくが、どうせなら「なぶつてやろう」と思いつく。盆山の陰に隠れる泥棒に向かって「あれは犬か、猿か」と言

「この辺りの者でござる」と、狂言の象徴的な台詞も述べられると、観客は舞台の世界に引き込まれていった。『盆山』は、盆山（盆）の上に石や砂で風景をかたどった置物をたくさん持っている男を義理しく思った近所の男が、盗みに行く話。夜にその屋敷に忍び込んだこの泥棒は、物色している時に主人「匡氏」に気づかれてしまう。主人の方はこの泥棒が顔見知りだと気づくが、どうせなら「なぶつてやろう」と思いつく。盆山の陰に隠れる泥棒に向かって「あれは犬か、猿か」と言

「この辺りの者でござる」と、狂言の象徴的な台詞も述べられると、観客は舞台の世界に引き込まれていった。『盆山』は、盆山（盆）の上に石や砂で風景をかたどった置物をたくさん持っている男を義理しく思った近所の男が、盗みに行く話。夜にその屋敷に忍び込んだこの泥棒は、物色している時に主人「匡氏」に気づかれてしまう。主人の方はこの泥棒が顔見知りだと気づくが、どうせなら「なぶつてやろう」と思いつく。盆山の陰に隠れる泥棒に向かって「あれは犬か、猿か」と言

「この辺りの者でござる」と、狂言の象徴的な台詞も述べられると、観客は舞台の世界に引き込まれていった。『盆山』は、盆山（盆）の上に石や砂で風景をかたどった置物をたくさん持っている男を義理しく思った近所の男が、盗みに行く話。夜にその屋敷に忍び込んだこの泥棒は、物色している時に主人「匡氏」に気づかれてしまう。主人の方はこの泥棒が顔見知りだと気づくが、どうせなら「なぶつてやろう」と思いつく。盆山の陰に隠れる泥棒に向かって「あれは犬か、猿か」と言

た悪あがきをする泥棒の愚かさが観客の心をくすぐる。

最後に「鯛（たい）の真似を迫られる。追い詰められた泥棒が、扇（あふぎ）を開いて背中（うで）に、鯛の尾ヒレに見立てると、会場は大爆笑。そのまま「タイタイ」と鳴きながら舞台上からはけていくと、笑いと共に大きな拍手が送られた。

続いて披露されたもう一つの演目は、「昆布売り（こぶり）」。太刀を持った大名（匡氏）が通りがかった昆布売りの商人（弘晃氏）に太刀を懸かせてみる。持ち方が悪いななどと散々なぶられた商人は、頭に来て太刀を抜く。ここから立場が逆転してしまい、この商人は大名に昆布を売らせ

「この辺りの者でござる」と、狂言の象徴的な台詞も述べられると、観客は舞台の世界に引き込まれていった。『盆山』は、盆山（盆）の上に石や砂で風景をかたどった置物をたくさん持っている男を義理しく思った近所の男が、盗みに行く話。夜にその屋敷に忍び込んだこの泥棒は、物色している時に主人「匡氏」に気づかれてしまう。主人の方はこの泥棒が顔見知りだと気づくが、どうせなら「なぶつてやろう」と思いつく。盆山の陰に隠れる泥棒に向かって「あれは犬か、猿か」と言

「この辺りの者でござる」と、狂言の象徴的な台詞も述べられると、観客は舞台の世界に引き込まれていった。『盆山』は、盆山（盆）の上に石や砂で風景をかたどった置物をたくさん持っている男を義理しく思った近所の男が、盗みに行く話。夜にその屋敷に忍び込んだこの泥棒は、物色している時に主人「匡氏」に気づかれてしまう。主人の方はこの泥棒が顔見知りだと気づくが、どうせなら「なぶつてやろう」と思いつく。盆山の陰に隠れる泥棒に向かって「あれは犬か、猿か」と言

「この辺りの者でござる」と、狂言の象徴的な台詞も述べられると、観客は舞台の世界に引き込まれていった。『盆山』は、盆山（盆）の上に石や砂で風景をかたどった置物をたくさん持っている男を義理しく思った近所の男が、盗みに行く話。夜にその屋敷に忍び込んだこの泥棒は、物色している時に主人「匡氏」に気づかれてしまう。主人の方はこの泥棒が顔見知りだと気づくが、どうせなら「なぶつてやろう」と思いつく。盆山の陰に隠れる泥棒に向かって「あれは犬か、猿か」と言

「この辺りの者でござる」と、狂言の象徴的な台詞も述べられると、観客は舞台の世界に引き込まれていった。『盆山』は、盆山（盆）の上に石や砂で風景をかたどった置物をたくさん持っている男を義理しく思った近所の男が、盗みに行く話。夜にその屋敷に忍び込んだこの泥棒は、物色している時に主人「匡氏」に気づかれてしまう。主人の方はこの泥棒が顔見知りだと気づくが、どうせなら「なぶつてやろう」と思いつく。盆山の陰に隠れる泥棒に向かって「あれは犬か、猿か」と言

「この辺りの者でござる」と、狂言の象徴的な台詞も述べられると、観客は舞台の世界に引き込まれていった。『盆山』は、盆山（盆）の上に石や砂で風景をかたどった置物をたくさん持っている男を義理しく思った近所の男が、盗みに行く話。夜にその屋敷に忍び込んだこの泥棒は、物色している時に主人「匡氏」に気づかれてしまう。主人の方はこの泥棒が顔見知りだと気づくが、どうせなら「なぶつてやろう」と思いつく。盆山の陰に隠れる泥棒に向かって「あれは犬か、猿か」と言





「構え」を教える小笠原匡氏(左手前)

狂言の「豊かな笑い」 中

WSで所作演技の奥深さを指導

盛況となった11月15、16日の「狂言師小笠原匡(ただし)サンパウロ(聖)公演」。そもそも狂言とは何か、という小笠原氏自身による解説から公演は始まった。

狂言は遡(さかのぼ)ること約650年。室町時代に現在の様式に近いものが確立されたとされる。能と狂言を合わせて能楽と呼ぶが、能楽は、現在まで一度も途絶

えることなく続いている。芝居の中で世界最古とも言われている。

また、同16日に日伯文化連盟(アリアンサ、大城幸夫理事長)の文化センターで行われた能楽演者向けのワークショップ(Ws)では、一般に能は悲劇で狂言は喜劇と言われることに触れ、小笠原氏は「(それだけではなく)能は『死』を、狂言は『生』をテーマにして

所作が残っている例として、『翁(おきな)』と『三番叟(さんばそう)』を挙げ、明確なストーリーを持つたない祈禱の舞の演目として紹介した。

実演しながら説明してみせたのは、狂言の表性。狂言は、非常に限られた舞台装置や衣装、道具、所作で多くのことを鑑賞者に想像させ、感じてさせる。小笠原氏は実際に扇(おうぎ)を振る動作を取り出して広げ、水平に持ち、とっくりに見立てた。

「さあ、さあ、お飲みあとして使う際を例に取

れ。ドブ、ドブ、ドブドブドブ!」と酒を注いで見せると、もう一つの狂言の特徴であるオノマトベ(擬音語と擬態語)にも言及。こうして小道具として本物のとっくりを用意することなく、液体の効果音をスピーカーから流すこともなく、扇一つで、雫の音まで演者自身が口で発して鑑賞者に想像させるのだ。狂言自身に想像させるのが好きな民族だからこそ誕生したのでは」と論を展開した。

ワークショップでは、「構え」、「いだつ」、「正座」といった基本的な狂言の所作から、笑い方、屋敷の戸を開ける一連の動きなどを、実演を交えながら参加者に指導。身

ことが、わずかながら、約30センチの動きで鑑賞者に迫る力を持つて動きを伝えることにつながる。といったことなどが説かれた。

終了後、ワークショップに参加した一同

(想像することが難しいと感じたと、充実した表情で汗を拭いながら語った。(河)つづく)



ワークショップに参加した一同

※この記事は新聞社の許可を得て掲載しております。



小笠原匡氏

狂言の「豊かな笑い」

下

小笠原氏「喜劇は自分を映す鏡」

11月15、16日に来伯し、2回公演とワークショップを行った和泉流狂言師の小笠原匡(ただし)氏。単独インタビューでは、ブラジル日系社会への思いや狂言の持つ力を聞いた。

今回の小笠原氏の来伯は2年ぶり4度目。2015年7月に日伯修好120周年の公式事業としてSESCサンパウロ州商業連盟社会サービ

主催の「能・狂言の

世界」の好評を受けて、HISブラジル(佐々木伸仁社長)側から公演の相談を受けたという。今回の公演は、日系社会からの来場を見込んで2回ともサンパウロ市リベルダーデ区の文協大講

堂で企画。1998年のブラジル日本移民90周年の際には、外務省の派遣公演で1カ月間伯国内各地を回った経験もあり、日系社会への理解も深

い。これだけ日本のも

のがブラジルに浸透して、日本に対するイメージも凄く良くて、やっぱり移民の方々の努力、お陰がある」と思

入れを語った。

また、小笠原氏はブラジルに限らず、フランスでの活動をはじめ、ヨーロッパ諸国でも精力的に活動している。イタリアでは、伝統仮面劇・コンメディア・デッタルテとも合作・共演したり、現代社会への風刺に富んだ

新作演目も発表するなど、革新的な狂言師としての側面も持つ。

今回の伯国公演では、日本の伝統的なものを紹介することに重きを置いて、古典演目2本と

なつたが、ポルトガル語を織り交ぜるといった工夫も観客からは好評を受けた。『盆山』と『昆布売

り』という演目選択も、視覚的に楽しめる要素や、立場逆転の風刺の笑

いなど、時代や言語を越えて通ずる普遍性が理由という。

ブラジルならではの取り組みも構想している

か、との記者の問いには、「今後、ブラジルに定期的に邪魔できるようなつたりしたら、ブラ

ジルのネタで、例えば神話とか民話とか風習、そういうものを題材に『ブラジル創作狂言』を作っ

て、(伯国の能楽演者の指導・育成を重ねるなどして)僕が演出してやってみるとか。ここ(ブラ

ジル)だったら、できるんじゃないかなという気がする」と語り、実験的な取り組みにも意欲的な姿勢を覗かせた。

こうした海外で狂言を

紹介したり、海外の文化

を取り入れようとする小

笠原氏の姿勢は、日本の

伝統芸能である狂言の世

界では珍しい。「もとも

と私は狂言の家柄の出で

はないので、私はそうい

うお役目なのかと思いま

す。外国の人の観点と

かを逆輸入して、狂言と

か伝統の魅力を発信した

い」と語る。

また、「喜劇とは自分

を映す鏡」と語る小笠原

氏。ほんの出来心で悪事

を働こうとする泥棒や、

立派なはずの地位なのに

うっかりしている大名と

いった人間像はいつの時

代にもどんな地にもい

る。そうした人物も、と

ても愚直で必死だ。だか

らこそ、離れて見る観客

には笑える。しかし、見

る奥の道徳的な側面を小

笠原氏は強調している。

そうした狂言が、自身

のルーツを大切にしよう

とする日系人に対して果

たせる役割は大きいと、

小笠原氏は語る。「日本

人は見えないものを信

じる、感じる、想像する

ことが長けている。(あ

るいは)好きだ。また、そ

ういう行為によってコ

ミュニケーションが図れ

る」とし、そうした日本

人の気質の背景には独特

な風土や日本古来の自然

との生き方があると指摘

する。

「ただ文化です、伝

統ですと押し着せるの

ではなく、豊かな笑

を通じて、(日系人も日

本人も含む)私たちの先

人に対する感謝の気持ち

を、記憶喪失から目覚め

させたい」と力強く語

り、目を輝かせていた。

(河) (おわり)

発行所
サンパウロ新聞社

聖市ミット・ミズモト街255

電話 3347-2000

http://www.saopauloshimbun.com

e-mail:redacaojp@

saopauloshimbun.com

購読料金半年 R\$ 435.00

東京支社

東京都江東区東陽5-16-1

石川マンション302号室

電話: 03-5633-7596 (代表)

FAX: 03-5633-7597